

宇治群島家島の自然調査概要報告

成尾英仁¹・桑水流淳二¹・森田康夫²・丸野勝敏²・山元幸夫³・廣森敏昭⁴・行田義三⁵

The Outline of Survey on Nature at Ieshima (Uji Islands), Western Part of Kagoshima Prefecture.

Hideto NARUO, Junji KUWAZURU, Yasuo MORITA, Katsutoshi MARUNO,

Yukio YAMAMOTO, Toshiaki HIROMORI and Yoshizo YUKITA

1 調査の経緯

鹿児島県立博物館では平成13年度から5ヶ年計画で、「触れ見る知る自然資料収集整備事業」をスタートさせ、本年度は主に奄美諸島と宇治群島での資料収集を計画した。宇治群島は川辺郡笠沙町にあるが、無人島のため調査が困難で、平成5（1993）年度の鹿児島県立博物館による調査など散発的なものがある程度で、ほとんど資料は収集されていない。本年度は3回の調査及び資料収集を計画したが、天候不良のため実施できたのは11月7～9日の3日間であった。調査は地質、植物、鳥類、昆虫、貝類の5分野で行われ、ほ乳類・両生類・は虫類などの分野については今回は未実施である。また、貝類については陸産貝類のみの調査を行った。

今回の調査は晩秋に近い季節であったことと、わずか3日間という短い期間であったため各分野とも悉皆調査は不可能で、調査の範囲は限られたものとなり、その結果は宇治群島の自然の一部を示しているに過ぎない。生物分野については、今後、年間を通じた継続的な調査を行い、季節変化や経年変化を把握する必要がある。

今回、調査を実施した島は東側の家島であり、向島については船で周囲を回っただけである。このため、向島の自然資料については全く収集できなかった。

それぞれの分野の調査結果概要については本研究報告の中で述べてある。

2 宇治群島の位置と自然の概要

宇治群島は笠沙町野間池から南西の方向約70kmの海上にある（図1）。宇治群島の主要な島は、東側にある宇治島（通称家島；以下、本報告では家島と呼ぶ）と西側にある向島である（図2）。二つの島ともほぼ南北に伸びており、とくに向島のビロウ湾と寄木が浦の間は狭く、馬の背状になって細長くのびている。向島は家島にくらべ面積が広く、約2倍の大きさである。二つの

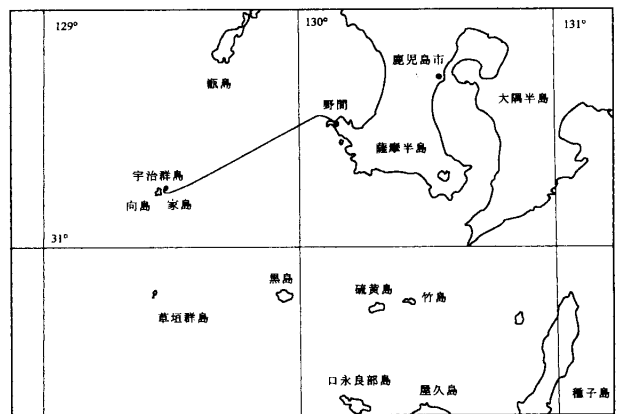


図1 宇治群島の位置 野間池港の南西約70kmにある

1：地質 2：植物 3：鳥類 4：昆虫 5：貝類

島はほぼ東西に位置しており、その間には隼人ノ瀬戸と呼ばれる狭い水道があり、ここは水深数十mと浅くなっている。家島及び向島にはいくつかの小島が付属するが、とくに向島には北側にある西立神島、南西側にある雀島の二つの比較的大きな属島がある。

図3に示すように、家島の周囲は高さ20~50m、所によっては80m近い急崖に囲まれており、近づくことは容易で無い。浜は礫浜となっており、北側の酒井浜および南側の片浦波止のごく狭い範囲に見られるのみである。片浦波止北西の小浦波止も本来は礫浜であったと思われるが、ここには現在小さな港が造られている。

地形はほぼ南北にのびる脊梁山地とその西側に離れた標高87mの小山塊からなる。脊梁山地の東側は断崖となっており、山地斜面は西側へ傾いている。このため谷筋も概ね西側へ開けている。また、脊梁山地と小山塊の間は南へ開いた谷となっている。

脊梁山地の標高は80~90mであるが、その中で最も高い山は南日岳で標高は95mである。しかし、全体を通して山容は穏やかで、なだらかな地形となっている。これらの山地を形成しているものは安山岩溶岩と安山岩質凝灰角礫岩で、堆積岩類は認められない。

前述のように谷は西側に開けているが、西にある山塊からの谷は東側にのびており、これら東西へのびる谷が合流して南側の小浦波止方向へ向かっている。このため、島内を流れる小河川は小浦波止へ流れ出している。小さな島の割には水量があるが、降雨の少ない時期には上流部は涸れ川になると思われ、今回の調査時には上流部には水溜まり程度しかなかった。小浦波止付近は河川によって運ばれてきた礫が堆積し、ごく小規模な平坦地を形成しており、ここにはかつて人工構造物も造られ、その名残が各所に残されている。

島の植物相は比較的単純で、シイ林は発達せずにタブノキやモクタチバナ、ハマヒサカキなどが構成する風衝低木林となっている。この林床にはナンゴクアオイの群落が見られる。山頂部の開けた明るい場所には、背の低いリュウキュウチクが群落を形成している。小浦波止や片浦波止近くのかつて人の生活していた痕跡のある場所では、ニオウヤブマオウの群落があり、その間にハマユウが点在している。ハマユウにはこれを食草とするハマオモトヨトウの幼虫が生息している。海岸部にはサツマノギクの群落があり、ところどころにオオイソノギクが見られる。また、移入種であるネズミとカイウサギが多数見られ、島内の草地を中心に痕跡が認められた。

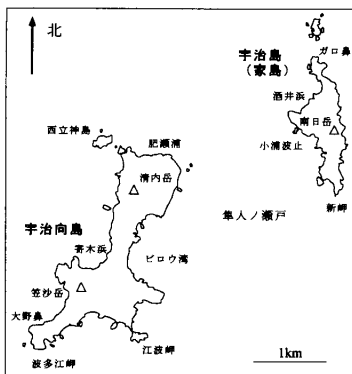


図2 宇治群島 東側の家島と西側の向島および属島からなる



図3 家島(宇治島)の地形 国土地理院発行2万5千分の1地形図「宇治群島」を使用した

はじめに

南九州地域における地質構造は、臼杵-八代構造線より西側を内帯、東側を外帯に区分されており、宇治・草垣群島はこの構造線の南方延長に位置する。

宇治群島の地質については、波多江(1956)、鹿児島県立博物館(1994)による報告があるが、離島であるため調査が非常に困難で、詳細なことは未だよく分かっていない。先行する二つの研究によれば、家島の地質は南薩・枕崎周辺などに分布する南薩層群と同時期と思われる火山噴出物からなり、向島の大部分も同じである。ただ、向島の南西部には堆積層があり、ここでは砂岩と頁岩の互層がみられる。

今回の家島の調査では、踏査可能な沢や海岸でルートマップをとり、同時にサンプリングも行った。また、急崖の海岸など直接観察できない露頭においては、双眼鏡などを用いて可能な限り調査を行った。

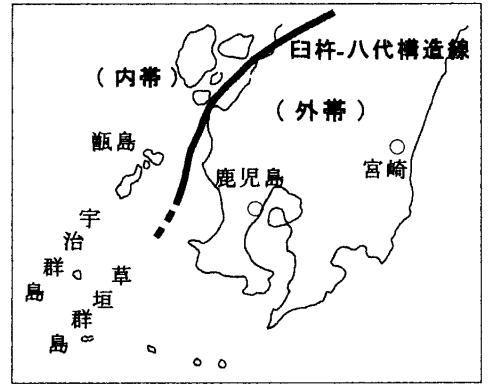


図1 南九州の地質構造図

1 地形・地質概要

家島は南北約1.9km、東西約0.8kmと南北方向に長い島で、面積は約0.6km²である。さらにその北方および南方の海上には小岩島がある。島内は開析の進んだ丘陵地形を示し、標高95mの南日岳を主峰として南北に脊梁が連なっている。しかもこの脊梁が東海岸に迫っているため谷はほとんどが西側に開けている。そのため河川の発達が悪く、唯一島の中央を南流する溪流があるにすぎない。

島の周囲はほぼ岩崖で囲まれており、東海岸は50m~100mほどのほぼ垂直な断崖で、西海岸は10m~60mほどの急崖になっている。入り江になっているところは西海岸の小浦波止、片浦波止の2カ所のみで、ここは礫浜になっている。

島全体で安山岩溶岩と安山岩質凝灰角礫岩が成層し、その層理面の走向はほぼ南北で、西に30°~50°傾いており、島の伸長方向に並行し

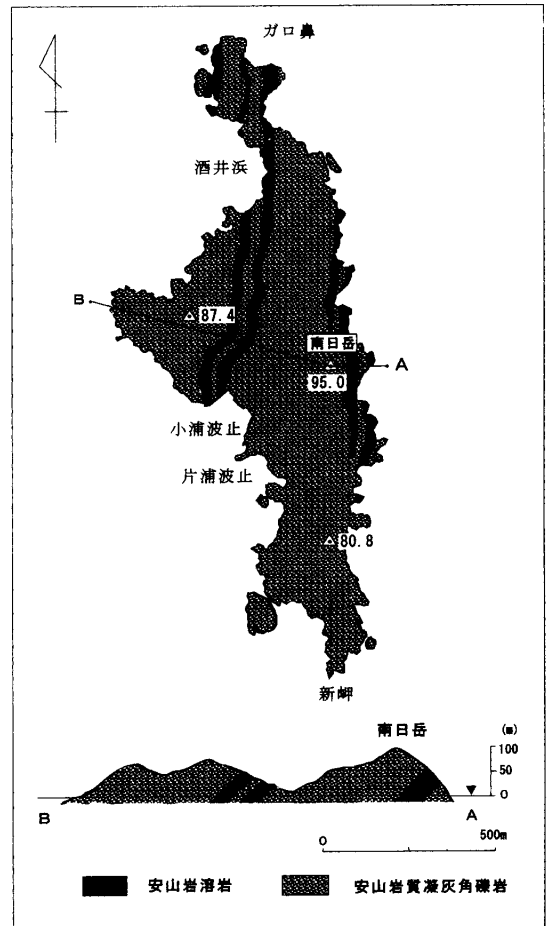


図2 家島の地質図と地質断面図

て地層が続いている。安山岩溶岩は青灰色～紫灰色で、斜長石の白い斑晶が目立ち、その間に輝石などの結晶もみられる。安山岩質凝灰角礫岩は暗緑色の火山灰中に、長径1cm～20cmほどの安山岩質の垂角礫が混在している。これらの岩石はやや変質しており、また石英脈などもみられる。今回の調査では、シラスなどの火砕流堆積物や新期の火山灰層は確認できなかった。

2 主な地質現象

地点①・・溶岩と凝灰角礫岩の互層からなる岩崖で、地層がほぼ垂直に傾斜している。また、幅約2mの破碎帯があり、その部分は地形的に鞍部になっている。他地域と比べて地層の傾斜が急で破碎帯がみられることから、断層もしくは地滑りなどにより岩体が移動していると思われる。

地点②・・高さ約80mの急崖が2段になっており、下段は凝灰角礫岩で、上段は溶岩である。その層理面の走行は南北で西に40°ほど傾いている。凝灰角礫岩の一部は荒波に洗われ、海食洞ができています。

地点③・・高さ約60mの急崖になっており、厚さ10m以上の溶岩の上位に凝灰角礫岩が重なっている。

地点④・・片浦波止の小さな入り江は、サンゴの破片や直径10cm前後の垂円礫などからなる礫浜である。周辺の岩石は凝灰角礫岩で、その中の礫は青灰色～紫灰色をした安山岩溶岩で直径1m程の角礫も多く含んでいる。全体に弱い変質を受け、淡緑色を帯びている。

地点⑤・・高さ約20mの凝灰角礫岩の急崖になっている。直径10cm～20cmほどの垂角礫で安山岩溶岩の礫がほとんどであるが、直径30cmの頁岩の角礫も含んでいる。また、この付近では、厚さ2cm～4cmの石英脈が多くみられる。

地点⑥・・港の広場では人頭大の角礫を多く含む凝灰角礫岩がみられる。全体に弱い変質を受け、淡緑色を帯びている。

地点⑦・・片浦波止の北側の岩崖では、溶岩と凝灰角礫岩が互層をなしている。溶岩は青灰色をおび比較的多孔質で、石基中に5mm四方の白色をした斜長石の斑晶がみられる。また、

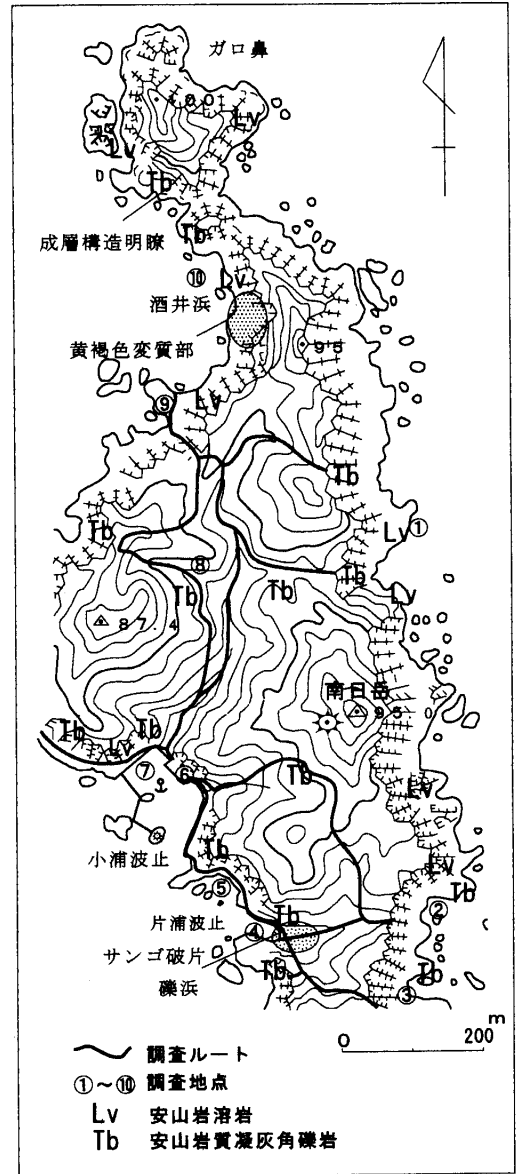


図3 調査ルート図

この溶岩には流理構造もみられ、厚さ10cm～30cmほどの板状に割れやすい。凝灰角礫岩は白色の長石を多く含む暗灰色の火山灰中に、直径1cm～30cmほどの垂角礫が混在している。礫種は紫灰色の安山岩溶岩である。

地点⑧・・沢底に、厚さ2mの玄武岩と思われる黒色の岩脈がみられる。この岩脈は北東－南西方向に延びている。

地点⑨・・青灰色の溶岩中に厚さ2cm～5cmほどの赤褐色をした岩脈（恐らくマンガンを含んでいると思われる）がみられる。この岩脈は西北西－東南東方向に2m以上延びており、溶岩が形成された後、熱水などによる亀裂充填によってできたものと思われる。

地点⑩・・ガロ鼻から酒井浜にかけては、溶岩と凝灰角礫岩が互層をなし、成層構造が明瞭である。その層理面の走行は南北で、西に30°～40°ほど傾いている。溶岩の厚さは5m～8mほどで3層みられる。酒井浜の急崖は黄褐色に変質し、一部崩落している。

3 まとめと今後の課題

家島はすべて火山噴出物からなり、安山岩溶岩と安山岩質凝灰角礫岩が成層している。その層理面の走向はほぼ南北で、西に約30°～50°傾いており、島の伸長方向に並行して地層が続いている。安山岩溶岩は斜長石の斑晶が多くみられ、輝石なども含んでいる。安山岩質凝灰角礫岩は暗緑色の火山灰中に、長径1cm～20cmほどの安山岩質の垂角礫が混在している。これらの岩石は全体的にやや変質している。

今後、火山噴出物の噴出源や火山の活動時期を特定するために、安山岩溶岩などの岩石の組成分析や年代測定などを行う必要がある。また、向島にも家島と同様の火山噴出物が広く分布しており、さらに砂岩や頁岩からなる堆積層も確認されている。これらの岩石学的特徴や地質構造を把握し、2島を総合的に調査する必要がある。

引用・参考文献

波多江信広（1956）宇治群島及び草垣島の地質．鹿大南方産業科学研究所報告，1，1-16．

鹿児島県立博物館（1994）鹿児島島の自然調査事業報告Ⅰ「南薩の自然」．143p．

はじめに

宇治群島の植物相については、1954年と1956年に内藤喬らの家島を主とした報告があり、1981年と1983年に田川日出夫らが両島の森林を調査した報告、そして1988年に迫静男・丸野勝敏らによる両島の詳細な報告があり、他の生物分野に比較すると調査は進んでいるほうである。

今回2001年の11月に、足かけ3日にわたって家島の植物を採集し標本化したので、その概要を報告する。採集標本は鹿児島県立博物館の収蔵資料として、当該博物館の収蔵庫に保管してある。なお採集した標本の同定については、鹿児島大学名誉教授の初島住彦氏に御指導いただいた。厚く御礼申し上げる。

1 家島の植物採集地域

家島は面積0.61平方kmの小さな無人島であるため、避難用の小さな栈橋と廃屋、南日岳山頂にある灯台に至る小道が1本あるだけで、他は樹林帯や藪を踏み分けて行くのみとなる。樹林帯の樹高はせいぜい7～8mで、尾根筋は見晴らしもよく、道に迷う心配はあまりない。しかし、傾斜の急な斜面や海沿いの崖も多く、採集には注意を要する。

採集は、第1日目は灯台周辺のタブノキ林、中腹のモクダチバナ林、島南西部の海岸付近で行い、2日目は午前中に島の南部の海岸から南東部の尾根を越えて灯台に至る低木林や叢林、午後は島北部に至る林内、最終日はキャンプを行った廃屋周辺で実施した。

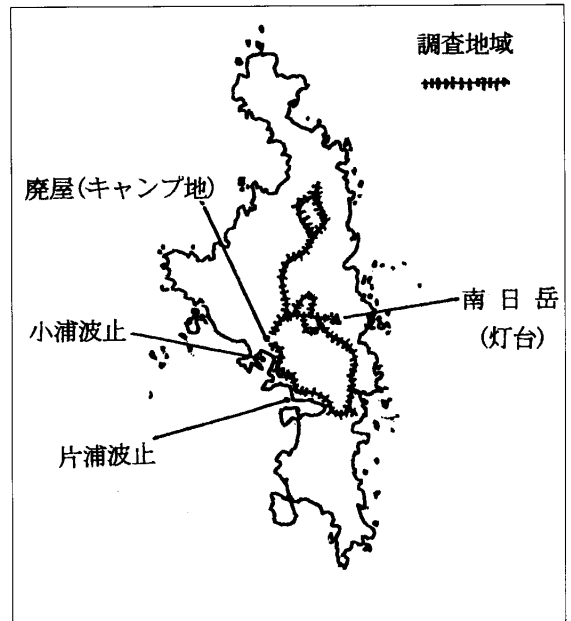


図 家島の植物採集地域

2 採集した植物と分布上注目すべき植物

文末に、調査期間中に確認及び採集したシダ植物と種子植物の目録をまとめた。確認・採集した高等植物は、全部で54科93種となり、そのうち48科83種を採集して標本にした。

これらの植物のうち、分布上注目すべき種や初記録種、疑問のある種について以下に述べる。

① ナンゴクアオイ *Asarum crassum* (ウマノスズクサ科) 固有種

宇治群島固有種のナンゴクアオイについては、1994年に当県立博物館の立久井昭雄氏によって詳細な報告がなされている。現在も当時と同じく、南日岳西斜面などの林床に広く群生しており、多くの株が花をつけていた。

- ② オキナワハイネズ *Juniperus taxifolia* var. *lutchuensis* (ヒノキ科) 分布の西北限
 琉球列島から奄美、口永良部島と北上し、宇治群島が分布の西北限となっている。家島の南西部の海岸断崖上で、小群落を確認した。
- ③ オオイソノギク *Aster ujiensis* (キク科) 固有種
 奄美以南の琉球列島に産するイソノギクより大型のシオン属の仲間で、北村四郎博士により新種とされた宇治固有の植物である。海岸の岩礁帯に、サツマノギクやホソバワダンと共に群生し、白色～薄紫色の頭花を多数つけていた。
- ④ フウセントウワタ *Gomphocarpus fruticosus* (ガガイモ科) 植栽
 昨年(2001年)夏、地元の漁師がカバマダラ増殖のため100株ほど植栽したものである。野生化したウサギに食い荒らされ、一株だけ生き残っていた。
- ⑤ 初記録・帰化植物
 人の上陸等に伴って持ち込まれ、新たに定着した植物と考えられる。どちらの種も、キャンプをした廃屋周辺で見られた。
- a コマツヨイグサ *Oenothera laciniata* (アカバナ科)
 b ヒメセンナリホオズキ *Physalis minima* (ナス科)
- ⑥ その他の初記録種
- a ホソバイヌビワ *Ficus sieboldii* (クワ科)
 南日岳南側斜面の乾燥した低木林内に希に見られた。
- b キランソウ *Ajuga decumbens* (シソ科) (疑問種)
 これまではヒメキランソウは記録されているが、キランソウはされていない。ヒメキランソウは長いほふく茎(走出枝)が出て、そこから出根するなどの特徴があるが、この個体にはそれが見られず、キランソウとした。再度、花期に採集して花形やほふく茎の状態を確認する必要がある。
- c ヤマイ *Fimbristylis subbispicata* (カヤツリグサ科)
 家島南部、片浦波止め近くの小扇状地で見られた。
- d リュウキュウヤブラン *Liriope spicata* (ユリ科) (疑問種)
 これまではヤブランの記録はあるが、リュウキュウヤブランは初記録である。地下に長い地下茎をのばしていたのでリュウキュウとした。これも花期に再度採集し、花色や花被片の大きさを確認する必要がある。
- ⑦ 疑問種
- a オオバライチゴ (リュウキュウバライチゴ) *Rubus croceacanthus* (バラ科)
 本州の暖地から四国、九州、琉球まで分布する落葉性の小低木で、茎は斜めに生えることが多い。一般に茎に腺毛が密生しているが、それがほとんど見られなかったので、変異が生じた可能性もある。今後新たに花期のものを採集し、詳細に比較検討する必要がある。
- b サツマサンキライ *Smilax bracteata* (ユリ科)
 ハマサルトリイバラとは別に、サツマサンキライと思われる個体を採集した。葉やつる

の形態はサツマサンキライに似ているが、花や実はなく、不完全標本なので記載しなかった。今後、完全標本を採集した後、詳しく検討したい。

表 宇治島（家島）の植物目録

【● 採集した種， ○ 確認した種】

シダ植物 *Pteridophyta*

科名	和名	学名	採集記録	備考
コバノイシカグマ科	イシカグマ	<i>Microlepia strigosa</i>	○	
オシダ科	オニヤブソテツ	<i>Cyrtomium falcatum</i>	●	
ヒメシダ科	ホシダ	<i>Thelypteris acuminata</i>	○	

[計 3科 3種]

種子植物 *Spermatophyta*

裸子植物 *Gymnospermae*

科名	和名	学名	採集記録	備考
マツ科	クロマツ	<i>Pinus thunbergii</i>	●	植栽
ヒノキ科	オキナワハイネズ	<i>Juniperus taxifolia</i> var. <i>lutchuensis</i>	●	西北限種 ②

[計 2科 2種]

被子植物 *Angiospermae*

[双子葉類]

科名	和名	学名	採集記録	備考
コショウ科	フウトウカズラ	<i>Piper kadsura</i>	●	
ニレ科	クワノハエノキ	<i>Celtis boninensis</i>	●	
クワ科	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i>	●	
	ホソバイヌビワ	<i>Ficus sieboldii</i>	●	初記録⑥-a
	オオイタビ	<i>Ficus pumila</i>	●	
	クワ(ヤマグワ)	<i>Morus australis</i>	●	
イラクサ科	ニオウヤブマオ	<i>Boehmeria gigantea</i>	●	
	カラムシ	<i>Boehmeria nipononivea</i>	○	
ウマノスズクサ科	ナンゴクアオイ	<i>Asarum crassum</i>	●	固有種 ①
タデ科	ツルソバ	<i>Persicaria chinensis</i>	●	
	ギシギシ	<i>Rumex japonicus</i>	○	
ザクロソウ科	ツルナ	<i>Tetragonia tetragonoides</i>	●	
スベリヒユ科	スベリヒユ	<i>Portulaca oleracea</i>	●	
キンポウゲ科	センニンソウ	<i>Clematis terniflora</i>	●	
アケビ科	ムベ	<i>Stauntonia hexaphylla</i>	●	
ツヅラフジ科	アオツヅラフジ	<i>Cocculus trilobus</i>	●	
	ミヤコジマツヅラフジ	<i>Pracylea insularis</i>	●	

科名	和名	学名	採集・記録	備考
ツツラフジ科	ハスノハカズラ	<i>Stephania japonica</i>	●	
クスノキ科	マルバニッケイ	<i>Cinnamomum daphnoides</i>	●	
	ヤブニッケイ	<i>Cinnamomum japonicum</i>	●	
	ハマビワ	<i>Litsea japonica</i>	●	
	タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i>	●	
ケシ科	キケマン	<i>Corydalis heterocarpa</i> var. <i>japonica</i>	●	
ベンケイソウ科	タイトゴメ	<i>Sedum oryzifolium</i>	●	
トベラ科	トベラ	<i>Pittosporum tobira</i>	●	
バラ科	シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis indica</i> var. <i>umbellata</i>	●	
	テリハノイバラ	<i>Rosa wichuraiana</i>	○	
	オオバライチゴ	<i>Rubus croceacanthus</i>	●	疑問種⑦-a
	ホウロクイチゴ	<i>Rubus sieboldii</i>	●	
マメ科	ハマナタマメ	<i>Canavalia lineata</i>	●	
	クズ	<i>Pueraria lobata</i>	●	
カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>	●	
トウダイグサ科	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i>	●	
モチノキ科	モチノキ	<i>Ilex integra</i>	●	
ニシキギ科	マサキ	<i>Euonymus japonicus</i>	●	
	コクテンギ	<i>Euonymus tanakae</i>	●	
	モクレイシ	<i>Microtropis japonica</i>	●	
ブドウ科	ノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	●	(テリハノブドウ)
	エビヅル	<i>Vitis thunbergii</i>	●	
アオイ科	サキシマフヨウ	<i>Hibiscus makinoi</i>	●	
ツバキ科	ハマヒサカキ	<i>Eurya emarginata</i>	●	
スミレ科	タチツボスミレ	<i>Viola grypoceras</i>	●	(ツヤスミレ)
グミ科	マルバグミ	<i>Elaeagnus macrophylla</i>	●	
	マルバアキグミ	<i>Elaeagnus umbella</i> var. <i>rotundifolia</i>	●	
アカバナ科	コマツヨイグサ	<i>Oenothera laciniata</i>	●	初記録・帰化⑤-a
セリ科	ボタンボウフウ	<i>Peucedanum japonicum</i>	●	
ヤブコウジ科	モクタチバナ	<i>Ardisia sieboldii</i>	●	
サクラソウ科	ハマボッス	<i>Lysimachia mauritiana</i>	●	

科名	和名	学名	採集記録	備考
リンドウ科	ヘツカリンドウ	<i>Swertia tashiroi</i>	●	
キョウチクトウ科	サカキカズラ	<i>Anodendron affine</i>	●	
ガガイモ科	ケナシツルモウリンカ	<i>Tylophora tanakae</i> var. <i>glabrescens</i>	●	
	フウセントウワタ	<i>Gomphocarpus fruticosus</i>	●	初記録・植栽④
クマツヅラ科	オオムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i> var. <i>luxurians</i>	●	
シソ科	キランソウ	<i>Ajuga decumbens</i>	●	初記録⑥ - b
ナス科	イヌホオズキ	<i>Solanum nigrum</i>	●	
	ハダカホオズキ	<i>Tubocapsicum anomalum</i>	●	
	マルバハダカホオズキ	<i>Tubocapsicum anomalum</i> var. <i>obtusum</i>	●	
	ヒメセンナリホオズキ	<i>Physalis minima</i>	●	初記録・帰化⑤ - b
ゴマノハグサ科	ハマトラノオ	<i>Pseudolysimachion sieboldianum</i>	●	
オオバコ科	オオバコ	<i>Plantago asiatica</i>	○	
アカネ科	ソナレムグラ	<i>Hedyotis biflora</i> var. <i>parvifolia</i>	●	
	ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i>	●	
スイカズラ科	ハマニンドウ	<i>Lonicera affinis</i>	●	
	ソクズ	<i>Sambucus chinensis</i>	●	
ウリ科	アマチャヅル	<i>Gynostemna pentaphylla</i>	●	
キク科	オオイソノギク	<i>Aster ujiensis</i>	●	固有種 ③
	オイランアザミ	<i>Cirsium spinosum</i>	●	
	ホソバワダン	<i>Crepidiastrum lanceolatum</i>	●	
	サツマノギク	<i>Dendranthema crassum</i>	●	
	ツワブキ	<i>Farfugium japonicum</i>	●	
	ツクシメナモミ	<i>Siegesbeckia orientalis</i>	●	
	ハルノノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i>	●	
	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i>	●	

[計42科 73種]

[単子葉類]

科名	和名	学名	採集記録	備考
イネ科	ハチジョウススキ	<i>Miscanthus condensatus</i>	●	
	リュウキュウチク	<i>Pleioblastus linearis</i>	●	
	ハマエノコロ	<i>Setaria viridis</i> var. <i>pachystachys</i>	●	
	コウライシバ	<i>Zoysia tenuifolia</i>	●	

科名	和名	学名	採集記録	備考
カヤツリグサ科	コゴメスゲ	<i>Carex brunnea</i>	●	
	ヒゲスゲ	<i>Carex oahuensis</i>	○	
	イガガヤツリ	<i>Cyperus polystachyos</i>	●	
	イソヤマテンツキ	<i>Fimbristylis ferruginea</i>	●	
	ヤマイ	<i>Fimbristylis subbispicata</i>	●	初記録⑥-c
ヤシ科	ビロウ	<i>Livistona chinensis</i> var. <i>subglobosa</i>	○	
サトイモ科	クワズイモ	<i>Alocasia odora</i>	○	
ツユクサ科	ツユクサ	<i>Commelina communis</i>	●	
ユリ科	リュウキュウヤブラン	<i>Liriope spicata</i>	●	初記録⑥-d
	ハマサルトリイバラ	<i>Smilax sebeana</i>	●	(疑問種)⑦-b
ヒガンバナ科	ハマユウ	<i>Crinum asiaticum</i>	○	

[計 7科 15種]

総計 54科93種

3 今後の課題

今回の調査・収集は11月にわずか3日間、家島だけで行ったもので、宇治群島全体の植物相を考える上では甚だ不十分である。今後、以下の点に留意して来年度以降の調査を実施し、植物相全体についての考察を試みることができるよう努める。

- ① 秋季以外の春季や夏季の調査・採集を行い、年間を通した調査記録となるよう実施時期を検討する。
- ② 対岸の向島は、家島より面積もひろく標高も高いので、植物種も多様であるといわれる。宇治固有のウジカラマツやウジカンスゲも自生しているので、上陸・登攀は困難であるが、一度は上陸して調査する必要がある。
- ③ 今回の調査では不完全標本も採集したが、これらの種においても、今後花や実のある完全標本の採集に努力し、疑問種等の種名をはっきりさせる。

引用・参考文献

- 内藤喬・新敏夫・大野照好, 1956. 宇治群島及草垣島の植物. 南方産業科学研究所報告, 1, 1, 17-38
- 迫静男・丸野勝敏・他, 1988. 宇治群島の植物相. 鹿児島大学農学部演習林報告, 16, 83-105.
- 初島住彦, 1989. 鹿児島県新分布植物. 鹿児島植物同好会会誌, 10, 94-98.
- 立久井昭雄, 1994. 宇治群島宇治島のナンゴクアオイの分布及び特徴について. 鹿児島県立博物館研究報告, 13, 1-4.

はじめに

宇治群島は、東南アジアとわが国本土や極東シベリアを結ぶ鳥類の渡りの中継地として知られているが、実際に鳥類の調査が行われたのは数回にすぎない（鹿児島県1987, 鮫島 1994）。これらの報告では30科96種が記録されている。また、2000年5月には新村則夫氏により新たにウズラシギ, コアオアシシギ, アカショウビン, クロジョウビタキ（本県初記録）が観察・撮影された。これらをまとめると、宇治群島では30科100種が記録されていることになる。

今回、11月7～9日の3日間にわたって宇治群島家島での出現種を記録したので報告する。

1 出現種目録

サギ科 Family Ardeidae

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax*

コサギ *Egretta garzetta*

カモ科 Family anatidae

カルガモ *Anas poecilorhynchos*

タカ科 Family Accipitridae

ミサゴ *Pandion haliaetus*

トビ *Milvus migrans*

ツミ *Accipiter gularis*

ノスリ *Buteo buteo*

ハヤブサ科 Family Falconidae

ハヤブサ *Falco peregrinus*

ハト科 Family Columbidae

カラスバト *Columba janthina*

キジバト *Streptopelia orientalis*

セキレイ科 Family Motacillidae

キセキレイ *Motacilla cinerea*

ハクセキレイ *Motacilla alba*

ミソサザイ科 Family Troglodytidae

ミソサザイ *Troglodytes troglodytes*

ツグミ科 Family Turdidae

ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus*

ウグイス科 Family Sylviidae

ウグイス *Cettia diphone*

メジロ科 Family Zosteropidae

メジロ *Zosterops japonicus*

ホオジロ科 Family Emberizidae

ホオアカ *Emberiza fucata*

ミヤマホオジロ *Emberiza elegans*

アオジ *Emberiza spodocephala*

アトリ科 Family Fringillidae

アトリ *Fringilla montifringilla*

マヒワ *Carduelis spinus*

アカマシコ *Carpodacus erythrinus*

シメ *Coccothraustes coccothraustes*

カラス科 Family Corvidae

ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

13科24種

2 出現種の概要

今回の調査で出現した13科24種のうち、カルガモ, ミソサザイ, ホオアカ, アトリ, マヒワ, アカマシコ, シメの7種は宇治群島での初記録種であり、これらを加えると宇治群島で確認された鳥類は31科107種となる。

今回記録されたゴイサギ、コサギ、カルガモ、ミサゴ、トビ、ハヤブサ、カラスバト、キジバト、キセキレイ、ミソサザイ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラスの計13種は、県本土および近辺の小島では留鳥として普通に生息している種で、全体の54%を占めた。この中で、これまで宇治群島で繁殖が確認されているのはミサゴだけであったが、今回新たに、リュウキュウチク林の林床で営巣・抱卵しているカラスバトを確認した。また、ミソサザイは留鳥性の強い種であるが、本島には繁殖に適した環境がないことから、渡りの個体であろう。冬季にトカラ列島などでも記録されているので、一部渡りをする個体がいることは間違いのないと思われる。その他の種については周年生息しているかどうか不明であるが、本島の自然環境からして多くは漂行してきたものと推測される。

渡り鳥は11種で全体の46%を占めた。冬鳥はツミ、ノスリ、ハクセキレイ、ジョウビタキ、ホオアカ、ミヤマホオジロ、アオジ、アトリ、マヒワ、シメの計10種、旅鳥はアカマシコ1種だけで、夏鳥は観察されなかった。アカマシコは本県では過去3回春季に観察されているだけの稀な旅鳥で、秋季に観察されたのは初めてである。旅鳥、夏鳥がほとんど出現しなかったのは調査の時期によるものであろう。

おわりに

宇治群島での調査は天候に大きく左右される。今回の調査も延び延びになり、やっとこの時期に可能になった。わずか3日間の調査で、しかも波が高く目前に見える向島には渡れず、不十分な面もあったので再調査する必要がある。また、これまでの調査はいずれも春と秋の渡りの時期に行われており、繁殖鳥についてはほとんど明らかになっていないので、これについても調査したいと考えている。

引用・参考文献

鹿児島県．1975．鹿児島県の野鳥

鹿児島県．1987．鹿児島県の野鳥

環境庁．2000．日本産鳥類目録

所崎・山元．1999．鹿児島県産鳥類リスト．鹿児島県立博物館研究報告第18号：21-42．

鯨島正道．1994．宇治群島の自然（鳥類）．鹿児島島の自然調査事業報告書Ⅰ．鹿児島県立博物館

はじめに

宇治群島は鹿児島県川辺郡笠沙町に属し、笠沙町野間半島の西端より南西方約70km, 東経129°29′, 北緯30°12′付近に位置し、家島・向島の2主島とその付近の少岩島から成っている。家島は最高点100mで、タブやモクダチバナ、ハマヒサカキなどの樹林がほぼ全島を占め、港近くにニオウヤブマオの群落やイネ科やキク科などの草本植物が見られる。

宇治群島家島の昆虫については、1985年5月にアサギマダラの調査(福田)、1993年9月の昆虫相(江平)、また向島については1983年10月のチョウ類と甲虫の調査(大原)などがある。

今回、当館の「触れ見る知る自然資料収集整備事業」の一環として2001年11月7～9日の3日間ではあったが、家島の昆虫について資料収集及び調査ができたのでここに報告する。なお、同定にご協力いただいた鹿児島昆虫同好会会員の福田輝彦氏と山下秋厚氏に、感謝申し上げる。

1 調査日程・調査方法

11月7日(水)……11時05分笠沙町野間港をチャーター漁船で出航。13時家島港着。

13時35分網捕獲法による調査開始。16時30分終了。

19時30分灯火採集開始、23時終了。

8日(木)……8時30分調査開始、16時30分終了。

9日(金)……8時30分調査開始、10時30分終了。11時家島港出航、13時野間港着。

2 調査結果

種名の配列及び学名は、チョウ目以外は平嶋義宏(1989)・日本産昆虫総目録によった。同定は主に筆者が行ったが、ガ類の一部は日本鱗翅学会員の福田輝彦氏に、コオロギは日本直翅類学会員の山下秋厚氏に依頼した。標本は当博物館に保管してある。

I トンボ目 ODONATA (1科1種)

<トンボ科 Libellulidae >

1 ウスバキトンボ *Pantala flavescens* 1♂ 他に5頭目撃

II ゴキブリ目 BLATTARIA (1科1種)

<マダラゴキブリ科 Epilampridae >

2 サツマゴキブリ *Opisthoptatia orientalis* 1頭 海岸近くのハマオモトの葉柄の間に多数

III カマキリ目 MANTOPEA (1科1種)

<カマキリ科 Mantidae >

3 チョウセンカマキリ *Tenodera angustipennis* 1♀ フヨウの枝上で捕獲

IV バッタ目 ORTHOPTERA (3科3種)

<コオロギ科 Gryllidae >

4 ツヅレサセコオロギ *Scapsipedus aspersus* 1♂ 灯火採集の時、これ1匹のみ

<カネタタキ科 Mogophlistidae >

5 イソカネタタキ *Ornemobius bimpaculatus* 1♂1♀ 海岸近くのハマオモトの葉柄に多数

<バッタ科 Acrididae >

6 トノサマバッタ *Locusta migratoria* 目撃 1頭だけ港近くの崖に飛び跳ねて逃げた

V カメムシ目 HEMIPTERA (2科2種)

<ナガカメムシ科 Lygaeidae >

7 ヒメジュウジナガカメムシ *Tropidothorax plebejus* 1頭

<ヘリカメムシ科 Coreidae >

8 ツマキヘリカメムシ *Hygia opaca* 1頭

VI コウチュウ目 COLEOPTERA (2科3種)

<オサムシ科 Carabidae >

9 ゴミムシ *sp* 2頭 樹林の中で採集

<テントウムシ科 Coccinellidae >

10 ナナホシテントウ *Coccinella septempunctata* 1頭

11 ヒメカメノコテントウ *Propylea japonida* 2頭

VII ハチ目 HYMENOPTERA (2科2種)

<ツチバチ科 Scoliidae >

12 ヒメハラナガツチバチ *Campsomeriella annulata annulata* 1頭

<スズメバチ科 Vespidae >

13 キアシナガバチ *Polistes rothneyi* 1頭

VIII ハエ目 DIPTERA (2科3種)

<ハナアブ科 Syrphidae >

14 ヒメヒラタアブ *Sphaerophoria menthastri* 2頭

<クロバエ科 Culliphoridae >

15 キンバエ *Lucilia caesar* 1頭

16 ホホグロオビキンバエ *Chrysomya pinguis* 1頭

IX チョウ目 LEPIDOPTERA (11科26種)

チョウ類 (6科11種)

<セセリチョウ科 Hesperidae >

17 イチモンジセセリ *Parnara guttata guttata* 1頭

<シロチョウ科 Pieridae >

18 モンシロチョウ *Pieris rapae crucivora* 1♂

<シジミチョウ科 Lycaenidae >

19 ウラナミシジミ *Lampides boeticus* 2♂1♀ 10頭以上目撃

20 アマミウラナミシジミ *Nacaduba kurava septentrionalis* 目撃, 捕獲失敗

ネットで捕らえ三角紙に入れようとした時, 逃げられる

21 ヤマトシジミ *Zizeeria maha argia* 2♂1♀ 10頭以上目撃

<マダラチョウ科 Danaidae >

22 アサギマダラ *Parantica sita niphonica* 1♀ 他に12頭(2♂, 10♀)にマーキング(2001.11.8, ウジ, No)する。全島で50~100頭ほどと推定するが, 崖上で吸蜜しており, なかなか捕獲できない。樹林の林床には食草になるツルモウリンカも多数生えており, 灯台近くの林床では産卵行動も観察できた。

<タテハチョウ科 Nymphalidae >

23 ツماغロヒョウモン *Argyreus hyperbius* 1♂目撃

24 ヒメアカタテハ *Cynthia cardui* 数回目撃, 捕獲失敗

25 リュウキュウムラサキ *Hypolimnas bolina f. kezia* 1頭目撃, 写真撮影

地質班の成尾・桑水流学芸主事が島北部の樹林の中で目撃, 撮影

26 アカタテハ *Vanessa indica* 1♀ 他に数頭目撃

<ジャノメチョウ科 Satyridae >

27 クロコノマチョウ *Melanitis phedima oitentis* 目撃, 捕獲失敗

港棧橋近くの崖窪地, 写真撮影・採集を数回試みたが失敗。

これまでの宇治群島でのチョウ類の記録は下記のとおりである。初は宇治群島初記録を表す。

+印は島内での目撃頭数を表す +:1~3頭, ++:4~8頭, +++:9頭以上

採集年月日 採集地・者	1983. 10. 6日~9日	1985.10. 10日~11日	1993.9.24日~25日	2001. 11. 7日~9日	
	向 島 大原 昌宏	家 島 福田 晴夫	家 島 江平 憲治	家 島 廣森 敏昭	
科名・種名					
セセリチョウ科					
イチモンジセセリ	○	目撃	○	○	++
シロチョウ科					
モンシロチョウ		目撃		○	+
キチョウ			○		
シジミチョウ科					
ウラナミシジミ				○初	+++
アマミウラナミシジミ	○		○	目撃	+
ヤマトシジミ	○			○	+++
マダラチョウ科					
アサギマダラ	○	○		○	+++
タテハチョウ科					

ツماغロヒョウモン	○		○	○	+
ヒメアカタテハ	目撃		○	目撃	++
リュウキュウムラサキ				写真・初	+
アカタテハ	○			○	++
ジャノメチョウ科					
クロコノマチョウ				目撃・初	+

ガ類 (5科15種)

<ハマキガ科 Tortricidae >

28 ウスコカクモンハマキ 1頭 (初記録)

<メイガ科 Pyralidae >

29 シロオビノメイガ *Hymenia recurvalis* 2頭 (初記録)

30 ワタヘリクロノメイガ *Diaphania indica* 1頭

31 ミナミウコンノメイガ *Pleuroptya sabinusalis* 2頭 (初記録)

32 ヘリグロノメイガ *Herpetogramma cynaralis* 2頭 (初記録)

33 ワモンノメイガ *Nomophila noctuella* 1頭 (初記録)

<シャクガ科 Geometridae >

34 ヨツモンマエジロアオシャク *Comibaena procumbaria* 1頭 (初記録)

35 ヤクシマフトスジエダシャク *Chogada yakushimana* 1頭 (初記録)

36 マダラエダシャク sp 1頭 (初記録)

<スズメガ科 Sphingidae >

37 ホシホウジャク *Macroglossum pyrrhosticta* 2頭 (初記録)

<ヤガ科 Noctuidae >

38 ハスモンヨトウ *Spodoptera litura* 1♂

39 ハマオモトヨトウ *Brithys pancratii* ハマオモトの芯の中で幼虫1頭目撃, 写真撮影

40 スジアツバ *Hypena masurialis* 1頭 (初記録)

41 ナカウスオビアツバ *Hypena sp. 8* 1頭 (初記録)

42 オオトビモンアツバ *Hypena occata* 1頭 (初記録)

3 結果の考察

- (1) 全部で25科42種の昆虫を確認できた。内訳はトンボ目1科1種, ゴキブリ目1科1種, カマキリ目1科1種, バッタ目3科3種, カメムシ目2科2種, コウチュウ目2科3種, ハチ目2科2種, ハエ目2科3種, チョウ目11科26種である。9月の調査(1993, 江平)と比較するとチョウ類は多く記録されたが, 全体的に種数・個体数, 大型昆虫類(9月はセミ科, コガネムシ科)の記録も少なかった。やはり, 11月という時期的なものの影響が大きいようだ。

- (2) チョウ類の中で、ウラナミシジミ、リュウキュウムラサキ、クロノマチョウは初記録種である。9月の調査(1993, 江平)でアサギマダラが確認されていない所を見ると、アサギマダラが秋に宇治群島にわたってくるのは、10月になってからだろうと推察される。(その年の自然条件にも左右されるのだろうが…)
- (3) ガの15種のうち12種は初記録であった。9月の調査(1993, 江平)では、6科29種が記録されており、内訳はシャクガ科1種、ヤガ科21種、その他である。今回の調査では9月に比べ、ヤガ科のガが極端に少なく、逆にシャクガ科のガが多いという結果が出た。ガの種類は多いとはいえ初記録の割合が高いのは、調査記録が2回だけという理由のほかに、前回は9月で今回は11月という时期的な違いによる影響も大きいのかかもしれない。時期によって発生するガの種類も違うのだろう。
- (4) 家島の昆虫相の特徴としては、海浜性の昆虫と飛翔力の高い昆虫が多く見られることである。海岸近くのハマユウ(別名ハマオモト)の葉の間には、イソカネタタキ、サツマゴキブリ、ハマオモトヨトウ(幼虫)などが確認された。飛翔力の高い昆虫としては、ウスバキトンボ、アサギマダラ、リュウキュウムラサキなどが挙げられる。

おわりに

3度目の正直で、やっと3回目の11月に調査ができたが、春から夏にかけての調査記録がほとんどない。この時期の調査も来年度はぜひ実施し、さらに継続的な調査も実施することにより、ガ類の発生時期による違いなどの新たなテーマや宇治群島の昆虫相を明らかにしたい。

参 考 文 献

- 大原 昌宏, 1984. 宇治群島・向島で採集した蝶類。SATSUMA 33 (91): 71-72
- 福田 晴夫, 1985. 宇治群島宇治島(家島)のアサギマダラ。SATSUMA 34 (94): 135-136
- 江平 憲治, 1994. 宇治群島の自然・昆虫。鹿児島県立博物館『鹿児島の自然調査事業報告書南薩の自然』:112-113
- 原色昆虫大図鑑Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 白水隆・中根猛彦・安松京三他著 北隆館 昭和48年
- 学研生物図鑑Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 学習研究社 平成2年3月
- 世界文化生物大図鑑 昆虫Ⅰ・Ⅱ 昭和60年6月
- 日本産蛾類大図鑑Ⅰ・Ⅱ 井上寛・杉繁郎・森内茂他 講談社 昭和57年

はじめに

平成13年度の県立博物館自然資料収集整備事業として、宇治群島の一つ家島の総合調査が平成13年(2001年)11月7日から9日までの2泊3日の日程で行われ、筆者は陸・淡水産貝類調査班として参加した。

宇治群島の陸産貝類相については、湊 宏「宇治群島・草垣群島の陸産貝類相」VENUS Vol. 41 No.2 1982 (宇治群島産 12科18種)、富山清升「宇治群島・向島の陸産貝類相」VENUS Vol.43 No.3 1984 (向島産 13科27種、家島産 12科21種)がある。湊 宏氏には採集品の同定をして戴くなど大変お世話になった。深くお礼申し上げる。

2 調査日程と調査の概要

11月7日

前日の悪天候で海はうねりが残っており、出港を1時間遅らせて11時10分に野間港を出港した。天気予報では波の高さが2mとなっていたが、島に近づくにつれて船尾でも波しぶきを浴びた。島に着いたのが13時10分、丁度2時間を要した。島には無人島とは思えないほど立派な避難港があり漁船が停泊していた。早速、船から荷物を降ろし、港で昼食を済ませた後キャンプ地まで荷物を運んだ。

家島はかつてカツオ漁の基地があって、盛況だった往時を物語る鉄筋コンクリートの建物があり、今では台風で窓や床が吹き飛ばされ無残な姿ではあるが、屋根があり段ボールを敷けばどうにか宿泊ができる。2泊3日分の食料は各自レトルト食品を持参したが、建物の中には夥しい数のネズミが先住しており、食料の保管に困った。苦肉の策として各自袋に入った食料を天井から紐でつるした。実に奇妙な風景である。このことでネズミからの被害は無く、調査に専念することができた。

14時頃から調査を開始した。建物のある付近はニオウヤブマオを優占種とし、ミゾソバ、ハチジョウススキ、ハマヒサカキの群落が広がっている。群落内にはおびただしい数のチャイロマイマイ、タネガシママイマイの死殻が散乱している。落ち葉の下からパンダナマイマイに似たホリマイマイの生貝を見つけた。

海拔95mの南日岳には灯台があり、そこまでは一本道の階段が続いている。道端の落ち葉や朽ち木を起こして見ると、先ず目についたのが殻高3mmほどの小さなウジグントウゴマガイである。落ち葉を一かきすると必ず2~3個は見つかる。ほかにクチビラキムシオイ、チャイロマイマイ、タネガシママイマイの生貝も採集した。

11月8日

6時起床、7時朝食。今日は灯台から南側へ降りてみることにした。山中は道があるわけではなくツルモウリンカ、アマチャズル、ハスノハカズラなどの蔓性植物が行く手を阻み苦難を強いられた。やっとの思いで沢を下って港に出たが、林内での収穫は少なかった。

11時過ぎ、今度は灯台に登る道の左側に入り、樹上性のチャイロキセルモドキと朽ち木の下にいるキセルガイ類に目標を定めた。山の中腹でリュウキュウエノキの幹にいるチャイロキセルモドキを1個見つけ、高いところだったので木の枝を使って採った。林内はモクタチバナを優占種としタブノキ、ハマビワ、イヌビワ、シマグワ、ヤブニッケイ、リュウキュウエノキなどが生い茂り、14時を過ぎる頃には暗くなるので木漏れ日のある所を見つて、地面に這いつくばってゴマガイ類やムシオイガイ類を採ることにした。朽ち木の下からハジメテビロウドマイマイ、ピントノミギセル、オオスミヤマキサゴ、イトマキヤマトガイ、ベッコウマイマイの一種、イボイボナメクジを採集し大収穫だった。16時頃、山を降りてキャンプ地へ戻りその周辺でオカチョウジ類を採集した。建物の近くを小川がちょろちょろ流れ港に達している。この小川にはかなりの密度でカワナナが生息している。川の水が港に流れ下った付近でイシマキガイの死殻を見つけた。生貝は小川を精査すれば見つかるものと思われる。

11月9日

朝食後荷物を片付け10時出港し、向島に上陸できれば下りて見る予定だったが波が高く島を一周しただけで帰路についた。

3 家島産の過去の記録と今回の採集記録

富山(1980)は家島産の陸産12科17属21種を記録している。今回の調査で筆者は陸産11科14属18種(2種は初記録)、淡水産2科2属2種(初記録)を採集した。

(1) 陸産貝類

科名	和名	富山	行田	固有種
ヤマキサゴ科	オオスミヤマキサゴ	●	○	
ヤマタニシ科	イトマキヤマトガイ	●	○	
	ケブカヤマトガイ	●		▲
ゴマガイ科	ウジグントウゴマガイ	●	○	▲
ムシオイガイ科	クチピラキムシオイ	●	○	▲
ヘソカドガイ科	ヘソカドガイ	●		
キセルモドキ科	チャイロキセルモドキ	●	○	
キセルガイ科	ピントノミギセル	●	○	
	ウジグントウギセル	●		▲
オカクチキレガイ科	オカチョウジガイ	●	○	
	マルオカチョウジ	●	○	
	トクサオカチョウジ		○	
	シリブトオカチョウジ	●	○	
	ホソオカチョウジ	●		
ナメクジ科	ヤマナメクジ	●	○	
ホソアシヒダナメクジ科	イボイボナメクジ		○	
ベッコウマイマイ科	Bekkochlamys sp.	●	○	
	Nipponochlamys sp.	●		
ナンバンマイマイ科	タネガシママイマイ	●	○	
	ハジメテビロウドマイマイ	●	○	▲
オナジマイマイ科	ヘソカドケマイマイ	●	○	
	ホリマイマイ	●	○	
	チャイロマイマイ	●	○	

(2) 淡水産貝類

科名	和名	富山	行田	固有種
アマオブネ科	イシマキガイ		○	
カワニナ科	カワニナ		○	

●富山の記録種 ○行田の採集種 ▲宇治群島の固有種

4 家島産陸・淡水産貝類目録

(1) 陸産

ヤマキサゴ科 **Helicinidae**

オオスミヤマキサゴ *Aphanoconia osumiense* (Pilsbry, 1901) (殻径 4 mm)

模式産地：喜界島 分布：宇治群島（家島，向島），喜界島，口之島，沖秋日島，佐多岬，宮崎県南郷町大島

ヤマタニシ科 **Cyclophoridae**

イトマキヤマトガイ *Japonia striatula* Kuroda, 1973 (殻高 5 mm)

模式産地：男女群島男島 分布：宇治群島（家島，向島），男女群島

ケブカヤマトガイ *Japonia hispidus* Minato, 1982 (殻高4.5mm)

模式産地：家島 分布：宇治群島（家島，向島）

今回は採集出来なかったが，富山の私信ではクチビラキムシオイと同様土の中から採集したとのこと。

ゴマガイ科 **Diplommatinidae**

ウジグントウゴマガイ *Diplommatina (Sinica) ujiinsularis* Minato, 1982 (殻高2.5mm)

模式産地：家島 分布：宇治群島（家島，向島）

ムシオイガイ科 **Alycaeidae**

クチビラキムシオイ *Chamalycaeus expanstoma* Minato, 1982 (殻径 5 mm)

模式産地：家島 分布：宇治群島（家島，向島）

ヘソカドガイ科 **Paludinellidae**

ヘソカドガイ *Paludinellassiminea japonica* (Pilsbry, 1901) (殻高5.5mm)

模式産地：高知県幡多郡大月町柏島 分布：房総半島・男鹿半島以南，四国，九州。
今回は採集できなかったが富山の私信によると，避難小屋周辺のコンクリート片の下にいるのを採集したとのこと。

キセルモドキ科 **Enidae**

チャイロキセルモドキ *Luchuena nesiotica* (Pilsbry & Hirase, 1909) (殻高18mm)

模式産地：屋久島，黒島 分布：宇治群島（家島，向島），佐多岬，屋久島，黒島，口之島

キセルガイ科 Clausiliidae

ピントノミギセル *Hemizaptyx pinto* (Pilsbry, 1901) (殻高10mm)

模式産地：種子島 分布：宇治群島（家島，向島），徳島県鳴門市木津，大分県白杵市，種子島，屋久島，口永良部島，竹島，黒島，硫黄島，口之島，中之島，悪口島

ウジグントウギセル *Mesophaedusa ujiguntoensis* (Minato, 1982)・(殻高26mm)

模式産地：家島 分布：宇治群島（家島，向島）

今回採集出来なかったが，富山の私信では朽ち木の下から見つけたとのこと。朽ち木を見つけたら手当たり次第ひっくり返して見たが見つからなかった。生息数が極めて少ないと思われる。

オカクチキレ科 Subulinidae

オカチャウジガイ *Allopeas clavulinum kyotoense* (Pilsbry & Hirase, 1904)・(殻高8mm)

模式産地：京都 分布：宇治群島（家島，向島），北海道，本州，四国，九州，大隅諸島，トカラ列島，奄美諸島，沖縄，八重山諸島

マルオカチョウジ *Allopeas brevispira* (Pilsbry & Hirase, 1904) (殻高6.4mm)

模式産地：兵庫県揖保郡新宮町篠首～香川 分布：宇治群島（家島），本州，四国，九州，大隅諸島，トカラ列島，奄美諸島

シリブトオカチョウジ *Allopeas mauritianum obesispira* (Pilsbry & Hirase, 1904)・(殻高10mm)

模式産地：琉球 分布：宇治群島（家島），トカラ列島，奄美諸島，沖縄，八重山諸島

ホソオカチョウジ *Allopeas pyrgula* (Schmacker & Boettger, 1891) (殻高8mm)

模式産地：神戸市 分布：宇治群島（家島），本州，四国，九州，大隅諸島，トカラ列島，奄美諸島

ナメクジ科 Philomycidae

ヤマナメクジ *Meghimatium fruhstorferi* (Collinge, 1901) (体長5cm)

模式産地：対馬 分布：宇治群島（家島，向島），本州，四国，九州，対馬，大隅諸島，トカラ列島，奄美諸島（カラーページ参照）

ホソアシヒダナメクジ科 Rathousiidae

イボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* Minato, 1989 (体長2.5mm)

模式産地：徳島県麻植郡山川町・高越山 分布：宇治群島（家島），山梨県，静岡県，和歌山県，徳島県，香川県（カラーページ参照）

ベッコウマイマイ科 Helicarionidae

Bekkochlamys sp. 殻径8mm

分布：宇治群島（家島，向島）

ヒラベッコウに類似種?（湊）（カラーページ参照）

Nipponochlamys sp.

分布：宇治群島（家島）

ナンバンマイマイ科 *Camaenidae*

タネガシマイマイ *Satsuma (Satsuma) tanegashimae* (Pilsbry, 1901)・(殻径30mm)

模式産地：種子島 分布：宇治群島（家島，向島），種子島，屋久島，大隅諸島，草垣群島，トカラ列島

ハジメテビロウドマイマイ *Neochloritis tomiyamai* Minato, 1982 (殻径22mm)

模式産地：宇治群島（家島） 分布：宇治群島（家島，向島）

オナジマイマイ科 *Bradyhaenidae*

ヘソカドケマイマイ *Aegista (Plectotropis) conomphala* (Pilsbry & Hirase, 1903)・(殻径9mm)

模式産地：屋久島 分布：宇治群島（家島，向島），鹿児島市，屋久島，種子島，口永良部島，黒島，草垣群島，口之島，中之島

ホリマイマイ *Bradybaena circulus hirosihorii* Kuroda, 1973 (殻径14mm)

模式産地：男女群島 分布：宇治群島（家島，向島），男女群島

チャイロマイマイ *Phaeohelix submandarina* (Pilsbry, 1890) (殻径30mm)

模式産地：琉球 分布：宇治群島（家島，向島），佐多岬，大隅諸島，黒島，草垣群島，トカラ列島

(2) 淡水産

アマオブネ科 *Neritiidae*

イシマキガイ *Clithon retropicta* (v. Martens, 1879) (殻高10mm)

模式産地：長崎 分布：宇治群島（家島），房総半島・能登半島以南

カワニナ科 *Pleuroceridae*

カワニナ *Semisulcospira libertina* (Gould, 1859) (殻高22mm)

模式産地：伊豆下田 分布：宇治群島（家島），北海道以南日本全国

引用・参考文献

- 湊 宏. 1982. 宇治群島・草垣群島の陸産貝類相 *VENUS* 41(2) 124-140
湊 宏. 1988. 日本陸産貝類総目録 日本陸産貝類総目録刊行会
湊 宏. 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究 日本貝類学会
富山清升. 1984. 宇治群島向島の陸産貝類相 *VENUS* 43(3) 199-210
肥後俊一・後藤芳央. 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録 エル貝類出版局
東 正雄. 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 保育社
行田義三. 1998. 熊毛の貝類相. 熊毛の自然 54-63 鹿児島県立博物館